

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720314

研究課題名(和文) 中近世移行期日本における港町の景観研究の基盤構築

研究課題名(英文) The Basic Study of the Landscapes of Port Towns from Medieval to Early Modern Japan

研究代表者

山村 亜希 (YAMAMURA, Aki)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：50335212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中近世移行期(16～17世紀中期)日本における都市景観の形成・変遷史の解明を目標とする研究代表者の研究の一環であり、当該期を代表する都市の一つである港町を対象とする。本研究は、歴史地理学における景観研究の基本的視角に基づいて、港町景観の研究基盤を構築するため、第一に当該期の港町に適した景観復原の視点・方法を検討した。第二に、全国の港町景観に関する先行研究と史資料等を網羅的に収集し、現段階で蓋然性の高い景観復原案を検討した。その中で、対象地域における城下町も含めた全体的な都市立地をふまえることの重要性を指摘し、尾張、防長、阿波において港町の立地と景観を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the academic viewpoints and methods of the landscapes of the port towns in the 16th and 17th century Japan. Then, this study collects the existing studies about the landscapes of medieval and early modern port towns, and choose the highest probability ideas of the each port towns. The landscape of port towns were influenced strongly by the local or regional spatial structures. As the result, the landscape study needs the meanings and functions of the urban location.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：港町 景観復原 中近世移行期 城下町 中近世都市 景観史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、中世日本における都市空間構造の形成・変遷史の解明を研究全体の目標とし、中世前・中期(11~15世紀)と中近世移行期(16~17世紀中期)の二時期に分けて、段階的に研究を進めてきた。中世前・中期の都市(国府、守護所)を対象とする研究の成果は、単著『中世都市の空間構造』吉川弘文館、2009に総括した。そこでは、当該期の都市空間構造が、先行する集落形態や風土、同時代の政治・社会・文化・宗教的文脈、空間認識に強く規定された結果、地域によって多様で、動的であったことを明らかにし、権力の理念・プランを強く反映し、画一的で固定的な空間構造の古代都城や近世城下町とは異なることを主張した。

この成果をふまえて、次に、中近世移行期に対象を移し、地域色豊かで動的な中世の都市景観が、均質で固定的な近世都市の景観へと転換するプロセスとメカニズムの解明を、研究の目標としている。中近世移行期の都市としては城下町と港町が代表例として挙げられるが、このうち城下町は、当該期の都市研究の主流で研究蓄積も厚い。

一方の港町は、城下町に比べると、研究史は浅い。しかし、海を介した世界諸地域の結びつきを重視する歴史学の動向を受けて、最近では城下町以上に注目を集めており、その景観に関する研究も、世界各地の港町を対象に学際的な広がりを見せている。それを牽引しているのは、地中海を中心とした西欧の港町研究であり、他地域の港町にも有効な復原方法や比較の視点を提供している。

日本の港町に関しては、近年、日本の港町の空間構造を総括し、その類型化を行う研究が文献史学や建築史学から発表されつつあり、注目される。その代表例が、仁木宏(『港湾をともしなう守護所・戦国期城下町の総合的研究(科研費報告書)』2008)、市村高男(『中世西日本の流通と交通』高志書院、2004)と、

宮本雅明(『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、2005)の3研究である。仁木は港町における寺社・武士の空間支配を、市村は地域の流通構造・経済圏と港町の立地との関係を、そして宮本は港町における街路・町・船着場の分布を論じ、それぞれが独自に、港町景観の類型化を試みている。

しかし、これらの研究が依拠する個別港町の景観研究は、必ずしも同じ視点・方法で復原されたものではない。そのため、港町の空間構造の類型案が、相互にいかに関連しているのかを問う視点が乏しい。つまり、現段階では、城下町研究と同等の水準まで、景観復原の視点・方法を整え、研究蓄積を増やす必要があると考える。

2. 研究の目的

研究代表者が目標とする中近世移行期における都市空間構造の形成・変遷史の解明には、城下町のみならず港町についても、景観変遷の過程を把握しなくてはならない。しかし、先述の類型化案を含め、現在の研究成果に安直に依拠することは早計であると考えられる。むしろ個別港町の景観研究に立ち戻って、復原方法と視点を再検討し、港町の景観を実証的かつ客観的に比較するための基盤を検討することが必要である。

以上から本研究は、中近世移行期日本における港町の景観研究の基盤構築に向けての検討と、研究事例の蓄積を目的とする。

3. 研究の方法

中近世移行期港町の景観研究の基盤構築に向けて、本研究では、(1)当該期港町に適した景観復原の視点と方法を検討する。また、(2)各港町の先行研究・史資料等を網羅的に収集し、妥当性の高い景観復原案を検討する。

(1) 景観復原の方法の検討

研究代表者が同時期の城下町研究で培っ

た景観復原の方法を基本とし、西欧の港町研究で示された先進的な復原方法と視点を参考に改良を加えて、日本の当該期港町に適した景観復原の方法を検討する。既に申請者は、日本の複数の港町において景観復原を試みた結果、具体的には以下の2点を中心に、城下町の復原方法に改良を加える必要がある。第一に、港町の景観は複雑で変化しやすい水辺の地形に強く規定されており、地形が景観に及ぼす影響は城下町よりもはるかに大きい。そのため、大縮尺の地図上で、旧地形を精緻に復原する方法の開発が必要となる。第二に、港町は近世初期に城下町ほど大規模な町割改変を受けていない。よって、近世・近代の屋敷割図・地籍図や町並建築群に、中世の景観構成要素(街路、街区、寺社、市・町、城・屋敷、船着場、倉庫など)の痕跡が、城下町以上に色濃く残されている。これらの資料における地割形態の分析を深化させることで、そこから、中近世移行期における各構成要素の位置や形態、それらの移動や変容のプロセスを推定できる。以上の2点を主に検討し、日本各地の当該期港町で、共通して適用可能な景観復原の方法を検討する。

(2) 港町景観研究の収集と再検討

全国の当該期港町のうち、先行研究と史資料の存在する港町を対象として、各港町の景観に関する先行研究と、復原の根拠となる史資料、中近世の歴史的文脈と地域構造に関する情報を可能な限り収集する。そして、(1)の方法に照らして、先行研究の景観復原案を再検討し、必要に応じて修正を加え、各港町において最も蓋然性の高い景観復原図を選定ないし作成する。このようにして検討を経た各港町の情報を整理する。

この検討結果を、追記・編集が容易な開放的で汎用的な一覧表(データベース)形式に整理することを試みる。この整理によって、これまで各地で独自に行われてきた港町の景観研究を集積することができ、研究の全体

像の把握が容易になる。また、一定の基準に合わせて情報を吟味し、再検討することで、恣意的で基準の不明瞭な港町の景観比較を排し、実証的で客観的な景観比較を可能にするよう努める。最後に、これらの成果をふまえて、当該期港町の景観形成・変遷プロセスに関する仮説を立て、今後の研究を展望する。

4. 研究成果

本研究においては、「研究の方法」で掲げた2点の課題を中心に取り組み、それぞれの課題に対して、以下の成果を挙げた。

(1) 景観復原の方法の検討

駿河江尻・清水を事例として、大縮尺の地図上で旧地形復原と、地割形態の分析の深化を行った。の地形復原では、大縮尺の地形図(5000分の1の旧版都市計画図)をベースとし、これにボーリング調査や発掘調査による地層・地質データを加えて、旧地形を推定し地図化を試みた。このとき、近世期の景観を描いた数種類の古地図、中近世史料・地誌における地形に関する記載、明治期の海図も、推定の補強材料として利用した。

の地割の形態分析では、明治初期の地籍図と近世の屋敷割図に記載された地筆、地目、街路、街区、水路等の形態を、同時代史料や近世地誌、考古資料、地元の伝承における地理情報と重ね合わせて考察し、景観構成要素の詳細な現地比定を行った。これを元に、屋敷、街路・水路、街区の成立順序といった景観形成プロセスを推定した。

そして、をふまえて、中近世移行期における江尻・清水の景観形成・変遷過程を明らかにした。この成果は、学会(史学会平成23年度例会)にて発表した。

(2) 港町景観研究の収集と再検討

日本各地の港町について、景観に関する先行研究、景観復原の根拠とされた史資料(同時代史料、発掘調査等の考古学データ、近世地誌、近世絵図、伝承、地籍図、都市計

画図、地質・地層データ)、 中近世の政治・社会・宗教・文化的文脈、流通・経済圏、交通ネットワーク、政治権力の支配領域といった地域構造に関する情報を、可能な限り網羅的に収集した。その中で、現段階で ~ のデータのそろそろ調査研究に適した港町は、西日本(東海・北陸以西)に集中することに気づいた。そこで、当初想定した全国規模での事例収集よりも、研究・資料の偏在を考慮して西日本を中心として行う方が効率的であると判断し、再検討の方針を一部修正した。

この先行研究の収集と再検討作業を通じて、西日本(主に東海・中四国)において、地域を代表する港町にも関わらず、不十分な景観復原案しか提示されていない事例が、当初想定した以上に多いことにも気づいた。また、ミクروسケールでの景観復原案は提示されていても、なぜその場所が主要港町として最適であったのかを問う立地論の視点が乏しいことにも気づいた。このとき、港町のみならず、城下町も含めた都市の立地を当該地域の空間構造をふまえて行う必要がある。そのように考えて、尾張熱田の景観復原研究を行った。また、阿波と防長においては、従来の中近世都市研究を立地論、景観論の視点で位置づけ直す研究を行った。尾張熱田の研究成果は、国際歴史地理学会にて英語で発表すると共に、論文にもまとめた。阿波、防長における研究成果も、国内学会での発表と論文によって公表した。

これらを総括すると、現段階では、4 点の知見と課題を得たと考えている。

申請者が中世国府や城下町研究で培った景観復原の方法(史資料の網羅的収集と、信憑性の程度を区別する史料批判及び地図化)に、微地形復原と地割形態の分析の深化を追加することが、当該期港町の復原方法として最適である。

当該期中で最も急で著しい港町の景観変化は、全国的に、大名権力の領国経営の一

環に港湾支配が組み込まれた近世初期(17世紀)におこる。この港町の近世化は、全国的に見ると、城下町の一部として包摂される「城下町化」と、藩の主要港湾として整備され発展を遂げる「外港化」の2つに大別される。先行研究を概観する限り、それぞれ特徴的な景観変遷プロセスを辿ったことが予想されるが、これは個別港町の実証的な景観復原の蓄積により検証する必要がある。

港町景観の近世化とは、その地域に存在した多種多様な中小中世都市(城下町・港町・市町・寺内町など)の中から、大名権力が特定の城下町や港町のみを選択し、そこに都市機能を集中させることと軌を一にする現象であった。換言すれば、港町の近世化とは、地域における中世都市の景観と立地の再編という地理現象である。地域構造の再編という側面を無視して、当該期港町における景観変遷プロセスのメカニズムを説明することはできない。よって、地域における中世都市システムの近世化の過程と港町景観の変化の意義を考察する必要がある。

港町の近世化は、詳細にそのプロセスとメカニズムを検討するならば、地域差が大きいことが予測される。この相違に着目することで、固定的で画一的なプランが想定されてきた、従来の近世港町論から脱却し、動的で実態に即した港町景観史を描くことができる。また、西欧港町においても、日本と同じく港町景観の近世化の大きな地域差を見出せることから、「近世化」という新しい指標による、港町景観の国際比較が可能になるだろう。

このような知見に基づき、平成 25 年度で本研究課題を終了させるのではなく、研究を発展継続させ、推進させる必要があると判断した。そこで、成果 ~ をふまえて、論点と分析対象を明確化して、新たな研究課題「港町景観の近世化プロセスに関する歴史地理学研究」を立て、本科研の最終年度の前

に、基盤研究(C)に前年度申請を行った。
この研究課題は採択され、平成 25～29 年度
に引き続き港町研究を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計4件)

1. 山村亜希「戦国期吉野川デルタにおける
勝瑞と港」(徳島県教育委員会編集・発
行『徳島県の中世城館』平成 23(2011)
年3月)550-559頁
2. 山村亜希「中世都市の空間構造」(山口
県編集・発行『山口県史 通史編 中世』,
平成 24(2012)年10月)670-698頁
3. 山村亜希「阿波勝瑞 城下町の立地と景
観」(中世都市研究会編『中世都市研
究 18 中世都市から城下町へ』山川出版
社,平成 25(2013)年9月)101-115頁
4. 山村亜希「地図で読み解く中近世の港町
熱田」(愛知県立大学歴史文化の会編『大
学の愛知ガイド こだわりの歩き方』
昭和堂,平成 26(2014)年3月)41-55
頁

[学会発表](計5件)

1. 山村亜希「中近世移行期における港町の
景観変化 駿河清水の近世化」史学研
究会例会,平成 23(2011)年4月16日,
京都大学
2. 山村亜希「防長における中世都市の立地
と景観」歴史地理学会第 54 回大会公開
講演会,平成 23(2011)年6月25日,
山口県旧県会議事堂
3. Yamamura, Aki, 'The Changing Landscape
of Port Towns from Medieval to Early
Modern Times in Japan', The 15th
International Conference of Historical
Geographers, 7th August 2012, Charles

University, Czech

4. 山村亜希「阿波勝瑞 城下町の立地と景
観」中世都市研究会 2012 大阪大会,
平成 24(2012)年9月1日,大阪歴史博
物館
5. 山村亜希「中近世の城・町・港と吉野川
勝瑞から徳島へ」人文地理学会第
279 回例会(特別例会)『川の流域史 吉
野川の特性と文化的景観』,平成 25
(2013)年6月8日,徳島大学

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者

山村 亜希 (YAMAMURA, Aki)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：50335212

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：